

大妻女子大学博物館を活用した大学教育

University education utilizing the Otsuma Women's University Museum

小井土 守敏¹, 檜崎 修一郎², 東條 沙織³
Moritoshi Koido¹, Syuichiro Narasaki², and Saori Tojo³

¹大妻女子大学文学部日本文学科, ²大妻女子大学博物館, ³大妻女子大学人間生活文化研究所

キーワード：大学博物館，大学教育，アンケート調査

Key words : University museum, University education, Questionnaire survey

1. 研究目的

本研究，平成 30 年度 大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」，大妻学院創立 110 周年記念要望課題「大妻女子大学博物館を活用した大学教育」の課題設定の背景には，中央教育審議会 2012 年答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ」であらためて提唱された“生涯学習”や“主体的学び”に基づいた，博物館等の社会教育施設の動きと，大学および大学における教育に求められる改革の動きがある。

たとえば，呉屋淳子は，「ミュージアムが内包する高等教育の可能性」¹のなかで，博物館が果たすべき役割は，文部科学省が掲げる「生涯学び続け，主体的に考える力を育成すること」（中央教育審議会 2012 答申）を目指す大学の質的転換に向けた改革に有用な要素が多くあることを指摘している。さらに羽田貴史の，将来の自己学習者としての学生を育てるために，大学での研究活動を通して獲得される探求能力が重要であるという指摘²を引用し，それは，「新しい時代の博物館制度の在り方について」（文部科学省「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」2007）で示された「市民とともに資料を『探求』し，知の楽しみを『分かち合う』博物館文化の創造」のあり方と重なっているとする。

こうした動きの中で，本学の博物館の実情をとりまとめるとともに，今後の活用法について検討を加えておくことには一定の意義があると考えられるのである。

大妻女子大学博物館は，2012 年 4 月に，博物館相当施設として東京都から指定を受けた，大学博物館としては，いわばまだ若い博物館である。学

芸員課程を履修する学生にとっては，その実習機関として認知されているものの，一部の学生には，その存在すら知られていないのが実情である。この現状を打開するべく，本学教員，当博物館学芸員，人間生活文化研究所研究員が横断的に連携し，博物館が大学教育に多角的に関わっていく機会を創出する試みとともに，その教育的影響・効果を調べてみたいと考えたのである。

大学・短期大学教育における博物館の利用の実態について調査したうえで，これを本学の教育に対する学生のニーズとして受け止め，さらなる本学博物館の教育上の活用のあり方を探り，博物館の一層の利用を促す契機とすべく，本研究課題を設定したのである。あわせて，この取り組みが本学における大学教育の価値とその位置づけを向上させる一助となることを期待する。

2. 研究実施内容

本稿は，当共同研究プロジェクトにかかる成果のうち，利用者アンケート調査についての集計結果，ならびにその結果についての考察を述べるものである。

2.1. 来場者アンケート実施展示の概要

アンケートを実施したのは，以下の企画展においてであった。

展示名：大妻女子大学日本文学関係貴重書展示
会期：2018 年 5 月 30 日（水）～6 月 12 日（火）

（6 月 3 日（日）のみ休館，13 日間）

展示品目：本学図書館，草稿・テキスト研究所が所蔵する，日本近代文学に関連する作家の直筆原稿，書翰，遺品等 30 品目余
大妻女子大学博物館による会期中の来場者数の

集計は、以下の通りである。

大妻 学生	大妻 関係	卒業生	高校生	一般	総数
180	63	24	351	203	821

高校生の来館者が突出して多いのは、大妻中学高等学校における授業の一環として、教員の引率のもとに見学いただいたためである。なお、本学大学生の授業時間内の見学については別に触れる。

2.2. 来場者アンケート質問項目

アンケートの質問項目は、以下の通りである。

- I. 来場者について
 - II. 当館への来館回数について
 - III. 当館（当展示）を知った経緯について
 - IV. 展示の満足度について
 - V. 印象に残った展示物について
 - VI. 展示解説（資料）の満足度について
 - VII. 今後の展示企画・博物館への希望等について
- アンケートの回答総数は288、すなわち回収率は全体の35%ほどであった。これは、決して高い回収率とは言えないが、その範囲内で、思うところを指摘してみたい。

なお、本報告におけるアンケートのデータ入力及び集計は、主として東條沙織が担当した。

2.3. 来場者アンケート集計結果

- I. 来場者の所属について
 1. 大妻女子大学在学学生 171名 (59.4%)
 - 文学部日本文学科 163名
 - 社会情報学部社会情報学科 2名
 - 短期大学部家政科 2名
 - 短期大学部国文科 1名
 - 人間文化研究家言語文化専攻 3名
 2. 大妻中学高等学校在校生 5名 (1.7%)
 - 高校生 5名
 - 中学生 0名
 3. 大妻学院関係者 15名 (5.2%)
 - 大学教員・助手 4名
 - 中高教員 2名
 - 職員 1名
 - 卒業生 8名
 4. 学外者 97名 (33.7%)
 - 大学生・大学院生 25名
 - 会社員・団体職員 35名
 - 高校生 16名
 - その他 21名

II. 当館への来館回数について

1. はじめて 226名 (78.5%)
2. 2～4回目 57名 (19.8%)
3. 5回以上 5名 (1.7%)

III. 当館（当展示）を知った経緯について

1. 当館ホームページ 6名 (2.1%)
2. 大学ホームページ 11名 (3.8%)
3. 掲示物（ポスター） 39名 (13.5%)
4. 教員から 142名 (49.3%)
5. 知人から 9名 (3.1%)
6. SNS 50名 (17.4%)
7. その他 31名 (10.8%)
（オープンキャンパス資料・千代田区報・図書館司書から等々）

IV. 展示の満足度について

1. 大変満足 150名 (52.1%)
2. 満足 115名 (39.9%)
3. ふつう 21名 (7.3%)
4. 不満 1名 (0.3%)
5. 大変不満 0名 (0.0%)
- 無回答 1名 (0.3%)

V. 印象に残った展示物について

自由記述（略）

VI. 展示解説（資料）の満足度について

1. 大変満足 126名 (43.8%)
2. 満足 107名 (37.2%)
3. ふつう 30名 (10.4%)
4. 不満 1名 (0.3%)
5. 大変不満 0名 (0.0%)
- 無回答 24名 (8.3%)

VII. 今後の展示企画・博物館への希望等について

自由記述（抜粋）

- ・芥川龍之介（他に、太宰治／宮沢賢治などの個人作家）の特集をしてほしい。（本学学生）
- ・大妻にこんなスペースがあることを知らなかった。もっと周知すべき。（本学学生）
- ・次回は古典系でお願いします。（本学学生）
- ・博物館があることを初めて知った。常になんらかの企画展示をやっているとよいと思う。（本学学生）
- ・大妻がこのような貴重な資料を持っていたことを知らなかった。（本学学生）
- ・大学のホームページでもっと告知をしてほしい。個人レベルのSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）では不都合な場合もある。（本学学生）

- ・たまたま S 先生が授業で解説されているところに居合わせてお話を聞くことができた。定期的に解説をしてほしい。(本学学生)
- ・パネルの活用など、展示に工夫の余地があると思います。(本学学生)
- ・素晴らしいコレクションをお持ちだと思います。また是非他の所蔵品も展示していただきたい。(学外者・大学生/学外者・高校生(類同))
- ・定期的に開催してほしい。(学外者・大学生)
- ・江戸、千代田に関する展示が見てみたい。(学外者・一般)
- ・展示物については満足いくものであったが、どういった順路で見ていくのかわかりづらかった。(学外者・一般)
- ・理系の者も楽しめる展示を開催してほしい。(学外者・一般)
- ・ギャラリートークを告知のうえ行ってほしい。(学外者・一般)
- ・告知(広報)をもっと大々的に行うべき。(学外者・一般)
- ・図録を作成して販売してほしい。(学外者・一般)

3. 集計結果から一まとめにかえて一

前述の通り、本アンケートは回収率35%の調査であるので、この集計結果をもって来場者全体の傾向ととらえることは難しい。あくまでも「回答してくれた来場者」の傾向としてではあるが、いくつかの指摘をしてみたい。

アンケート回答者の大半は本学学生であり、かつ授業、例えば文学部日本文学科の1年次必修科目「近代文学概説」の授業で担当教員に引率されてきた者たちであるようだ。日本文学科の学生の数が突出していることと、「初めて来館した」数が多いのはそのためである。ただ、当学科1年次生が全員回答したとしても、40名ほどは他学年の学生で、自主的に来場したことになる。また、授業で引率されて来た1年次生のおそらく初めて来場した者を除くと、100名ほどが、今回初めて当博物館を訪れたことになる。大妻女子大学博物館の存在を、内外に(特に本学学生に)知らしめるという目的に照らせば、多少は功を奏したと言えるであろう。

第2回目となった今回も、授業の一環として当展示を活用して下さった教員があったことは嬉

しい限りである。本学が所蔵する資料が本学学生の教育に用いられる機会を生み出すという観点からすれば、これは、博物館と、図書館と、学部教員の連携によって成立した教育の場と言えるだろう。こうした連携が、本学博物館を核として、学内の他の様々な分野でも拡大していくことが期待される。

さて、今回のアンケートの回答者のおよそ3割が、学外者であった。このことは、報告者を多少なりとも驚かせたが、同時にとても喜ばしいことでもあった。当博物館の周知はもちろんであるが、地域社会への貢献という、我々大学に与えられた使命を、ほんの一端でも担えたためである。これらの学外者は、いかにして当館(当展示)を知ったのであろうか。回答してくれた学外者97名に絞り込んで、当館(当展示)を知った経緯を見てみると、

1. 当館ホームページ	4名 (4.1%)
2. 大学ホームページ	5名 (5.2%)
3. 掲示物(ポスター)	17名 (17.5%)
4. 教員から	7名 (7.2%)
5. 知人から	8名 (8.2%)
6. SNS	44名 (45.4%)
7. その他	12名 (12.4%)

であった。

SNSの割合の高さが目を引くとともに、SNSによって当展示を知った者の大半が学外者であった(50名中44名)ことがわかり、SNSによる告知効果の特徴が現れたかたちとなった。掲示物については、今回博物館がポスター並びにフライヤーを作成し、各大学博物館、関係者に送付の上、掲示を依頼した。かくいう報告者も、個人的なつながりで神田神保町の古書店等に掲示をお願いしている。こうした広報活動も、一定の効果があつたことが理解されよう。この、告知・広報に関しては、大学の広報担当の協力を仰いで、一層の努力と工夫が求められるところである。

大妻学院関係者のうち、卒業生が、いかにして当展示を知ったのかということについては、非常に興味を引くところである。ただし、8名の回答者を見る限り、とくだんの偏りはない。大学ホームページ、教員から、SNSを通してと、いったところである。博物館発表の数値によると、卒業生は24名の来館があつたとのことなので、その人達がどのようにこの情報を得たのか、逆に言うと、どのようにしたら卒業生に情報を届けられるか、

という部分に、なおも検討の余地があるのではないか。博物館が、同窓生が集える場になれないだろうか、とは、檜崎修一郎当博物館学芸員の言であった。

展示内容、解説資料については、概ね好評のようであるが、このようなアンケートを実施して、なかなか酷評されることはないであろうから、ただ喜んでばかりはいられまい。まだ当貴重書展示も2回目(2年目)であり、所蔵品を総花的に展示するに留まっているが、ゆくゆくは、展示テーマを明確にし、よりアカデミックなアプローチが求められていくことになるだろう。展示を企画することにより研究が深められ、その成果を用いて学生の教育が行われる、というようなサイクルが生まれたならば理想的であろう。

自由記述による当博物館への希望・意見は示唆に富んでいた。展示のテーマ、展示物の配置についての提言から広報のあり方に至るまで、貴重な意見を頂戴した。応えられるところから順次応えていきたいと考えている。当博物館の所在や、本学がこうした貴重書を所蔵していることが周知できた点は、素直に喜ぶたい。

2019年度、第3回を数える大妻女子大学日本文学関係貴重書展示は、古典籍の展示を中心に、11月に開催すべく企画を進めている。その中で、いた

だいた意見を少しでも活かせるよう努めていく所存である。なお現在、当博物館では企画展「東南アジア狩猟採集民の生活と子どもの発育発達—文明は人の身体から何をうばうのか—」が開催されている。本学の様々な学部学科・研究所が、それぞれの特性を生かして博物館を活用するようになればと願っている。

当共同研究プロジェクトの報告が、そうした動きへの嚆矢として、多少なりとも参考になる部分があったならば幸いである。

追記

当プロジェクトの共同研究者であった大妻女子大学博物館学芸員、檜崎修一郎氏は、戦没者の遺骨収集のために訪れていたマリアナ諸島・テニアン島にて、2019年3月21日に急逝されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

引用文献

- [1] 『民博通信』No.153, 2016
- [2] 「FDの反省と仮題」, 『現代の高等教育』No.559, 2014